

浮遊

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士前期課程
2026年3月修了

高 源

主査 百瀬 俊哉 副査 大日方 欣一 佐藤 慈

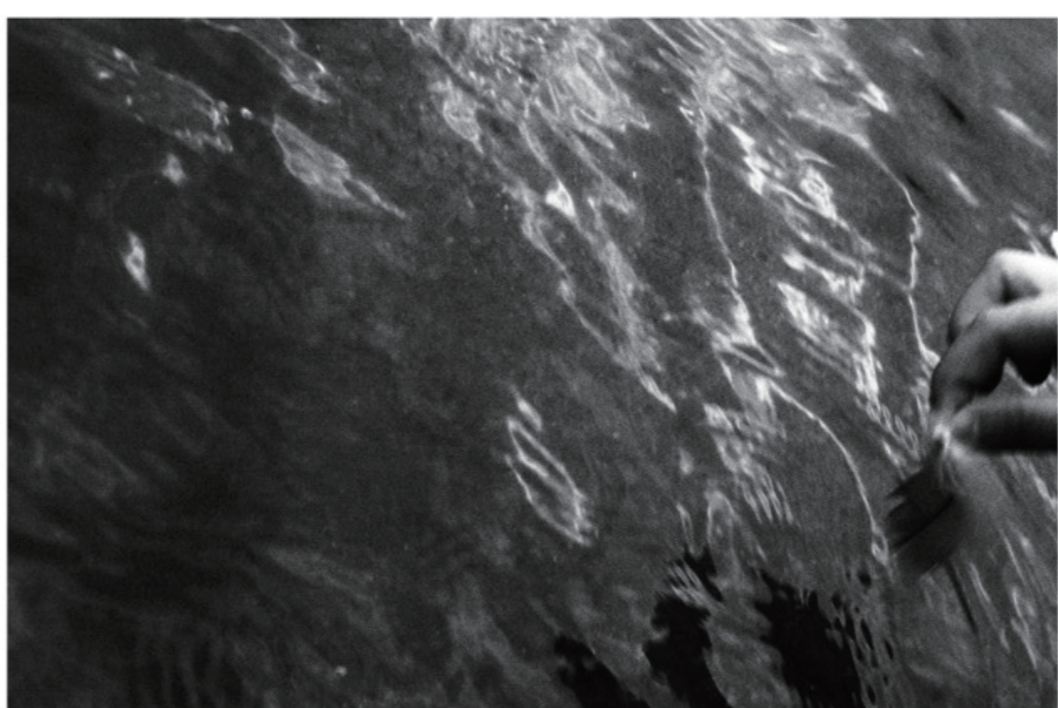
研究背景

私は自分の内面に生じる感覚や感情を、言語によって表現することに難しさを感じてきました。そうした言葉にならない感覚は、自分の中に留まり、他者と共有されにくいものでもあります。そのような経験から、私は写真という表現手段に可能性を見いだしました。写真は、言語に依らず視覚的イメージを通して、曖昧な感覚や記憶の断片を提示することができます。撮影時の視点や選択が像に反映される写真は、外界の記録であると同時に、私自身の内面を映し出す媒体として機能すると考えています。

研究方法・目的

本研究の目的は、写真表現を通じた自己開示のプロセスとその可能性を明らかにすることです。特に、言語化が困難な内面の感覚や記憶が、写真によってどのように可視化され、他者と共有されるのかを検討します。自身の制作実践である写真作品「浮遊」を分析対象とし、撮影行為や作品構成を考察することで、写真表現における自己開示の深化と、その表現的意義を明確にすることを目的とします。

研究概要



成果・まとめ

本研究では、写真が現実の記録媒体にとどまらず、私自身の内面にある感覚や記憶を視覚的に表現しうること明らかにしました。写真作品「浮遊」の制作と分析を通して、撮影者の視点や被写体の選択、編集による構成が、内面性の表出に重要な役割を果たすことを示しました。これにより、写真表現は自己の内面を整理・認識する手段であると同時に、鑑賞者との間に感覚的な共鳴を生み出す可能性を持つことを、本研究の成果として示しました。



指導教員コメント

本作品は、言語化が難しい内面的感覚や記憶を、写真という非言語的表現を通して丁寧にすくい上げようとする試みである。撮影者自身の感覚に深く向き合いながら、視点の選択や構成、トーンの統一によって「浮遊」という感覚を視覚化しており、作品全体に静かな一貫性が認められる。写真を単なる記録にとどめず、内面と外界を媒介する表現として捉えている点は、本制作の重要な成果である。

百瀬 俊哉